

発達志向アプローチの提言 — ICI からの声明  
Proposal for the Development-Oriented Approach  
— A Statement from the Integral Career Institute (ICI)

(Statement)

2026年2月24日  
インテグラルキャリア研究所

〔1.0.0 版〕

発達志向アプローチの提言 — ICI からの声明 . . . . . 1

## 発達志向アプローチの提言 — ICI からの声明

インテグラルキャリア研究所 (ICI) は、現代のキャリア支援および対人支援の実践が、重要な転換点に差しかかっているとの認識に立っている。

これまでの支援実務は、長らく「適応」を中心的な目的として発展してきた。個人が環境に適応し、役割を遂行し、社会的機能を安定的に果たすことは、依然として支援における重要な基盤である。この点において、適応志向段階のキャリア支援が果たしてきた歴史的役割は大きく、その有効性が否定されるものではない。

しかし近年、キャリア支援および心理支援の現場においては、適応という観点のみでは十分に把握しきれない課題が顕在化している。客観的な成功や安定を達成しているにもかかわらず持続的な空虚感を訴える事例、役割移行期における自己同一性の揺らぎ、あるいは人生中期以降に生起する意味の再編要求などは、従来の適応志向モデルの射程を超える現象として観察されている。

これらの現象は、個人が単に環境に適応する存在ではなく、自己と世界を理解する枠組みそのものを生涯にわたり更新し続ける存在であることを示唆している。この視点に立つとき、キャリア支援は、行動調整や意思決定支援にとどまらず、意味構造の発達の変容に伴走する営みとして再定義される必要がある。

**ICI は、この歴史的移行を踏まえ、既存の意味志向段階および適応志向段階の実践を継承しつつ、それらを縦方向に拡張する枠組みとして、発達志向アプローチ (Development-Oriented Approach) をここに提言する。**

発達志向アプローチは、従来のキャリア支援モデルを置き換えるものではない。むしろ、第一層の適応支援、第二層の意味志向支援が持つ実務的価値を尊重した上で、これまで十分に可視化されてこなかった第三層——すなわち成人期における意味構造そのものの発達過程——に実践的に焦点を当てるものである。

この立場において、人は固定的な特性をもつ存在でも、単に環境要求に反応する存在でもない。人は、仕事経験、役割移行、関係性の変化、そして人生の節目を通して、自他理解の枠組みを更新し続ける発達の存在として捉えられる。キャリアとは、その更新過程が具体的な人生文脈の中に現れたものであり、支援の焦点もまた、この縦方向の変容力学に向けられる必要がある。

もともと、現時点において「発達志向心理学」あるいはそれに相当する統合領域が、独立した制度領域として確立しているわけではない。成人発達理論、キャリア構築理論、ナラティブ研究、人間性心理学的伝統など、人の変容プロセスに関わる知見は各所で成熟しつつあるものの、それらを横断的に統合した実践枠組みは、なお形成途上にある。

ICI は、この「前段階」にある知の地平に対して、理論的提唱にとどまらず、実務現場における運用モデルの開発と検証を通じて具体的な形を与えていくことを、自らの重要な役割として位置づける。

今後 ICI は、成人発達理論、キャリア支援実務、心理臨床的知見、組織文脈への理解を統合し、発達志向アプローチの実装可能性を段階的に検証していく。その過程において、本提言は固定的な完

成モデルを提示するものではなく、実践と研究の往復の中で更新され続ける「開かれた枠組み」として運用されることを意図している。

**人が生涯にわたり意味構造を更新し続ける存在であるという理解に立つとき、キャリア支援と心理支援は、適応支援の枠を超え、発達支援として再編成されていく可能性を持つ。ICI は、この移行を静かに、しかし着実に現場実装へと接続していくことを、ここに表明する。**

